



ことばひと 詞人 くまさん
に へい 二瓶
ゆう き 勇樹 さん

子どもたちに生き生きとした背中を

二瓶さんは2011年10月、奥さまとお子さん3人のご家族で福島県郡山市から洞爺湖町へ避難されました。「原発事故の影響に不安を感じ、事故直後からすぐに避難先を探していました。将来、仕事など大人の事情を理由に子どもたちに何もできなかったとは言えないと思いました。2011年3月17日に末子が生まれたこともあり、子どもたちへの影響がわからないまま何もせずにいることはできませんでした。避難先を探すうちに洞爺湖町で保養受入をしているNPO法人を知り、2011年8月に保養プログラムに家族で参加しました。洞爺湖町に来たのはその時が初めてです。現地での受け入れを担当する職員が必要ということで、仕事があるのなら迷うことはないかと移住を決め、10月に引っ越しをしました。ところが、2013年4月、洞爺湖町への保養の需要が少ないということで、NPO法人が撤退することに。洞爺での仕事なくなるということ。洞爺湖町から引っ越すというのは考えられないくらい町が気に入っていたので、ここで何ができるんだろうって考えました。」

二瓶さんは震災を機に人生観が大きく変わったと言います。

「以前は保険会社の営業をしていて、震災がなかったら辞めることはなかったと思います。震災で色々なことを考えさせられました。競争社会で人間関係などのストレスを感じながら働くことにも疑問を感じるようにもなりました。正直、避難した頃は、『どうしてこんな目に合わなきゃならないんだ』と何かを責めずにはいられませんでした。でも、何かのせいにしたところで自分たちの人生がよくなるわけでもありません。子どもたちにはそんな姿よりも生き生きとした背中を見せていたいと思い、考えた結果、サラリーマンはやめて詞人になろうと決めました。あんまり長く考えずに決めましたね。イラスト描いていたわけでもなく、習字が得意なわけでもないのに(笑)。妻に言ったら『何を考えているの?』と怒られましたよ。始めてみたはいけれど、家族5人が食べていくには収入が追い付かない。妻がパートに出てなんとか切り盛りしている状態でした。」

奥さまの光子さんは布雑貨づくりが趣味で、いつか雑貨店を開きたいと漠然と考え



パステルで背景を描き、筆で詞を書く「くまさん」。すべては顔を見て浮かぶインスピレーションとのこと。

ていたそうです。

「洞爺湖畔の雑貨店オーナーと縁があったのですが、都合により閉店することになったんです。その時『この店をそのまま使わないか?』と話が舞い込んできました。妻はせっかくの機会だから…と思い切って布雑貨店を兼ねたカフェを始めることにしました。布雑貨の制作からカフェでの接客、ランチづくりも妻ひとりで営んでいます。冬期間は休業中ですが、布雑貨品は1時間や2時間で出来上がるものでもないので、4月からの再オープンに向けて忙しくしています。」

二瓶さんは路上やイベントでの出店以外で何ができるのかと日々、アイデアを練っているそうです。

「その一つに名刺づくりを始めました。その方の職業、名前、雰囲気に合わせて作っています。『くまさんが作ってくれた名刺、とっても好評です!』と報告を受けたときは嬉しかったです。出店した時でも、みなさんの笑顔を見ると詞人をやっているとよかったです。」



それぞれのイメージに合わせて作成する名刺は個性豊かです。



光子さんはハンドメイド雑貨&カフェ『MITTSU』のオーナーさん。ひとつひとつが手づくりで、洋服やバッグ、小物などが並ぶショップは光子さんのセンスがキラリと光ります。



あんまりお金のことは言いたくないのですが、現実には厳しくもあります。妻には感謝の言葉しかありません。この先『子どもたちに見せる背中』が荒んでしまうことがないように自分が今ここでできることを精いっぱいしていきたいと思いますね。

はっきりと理由はわかりませんが、不思議と私は洞爺湖に強く惹かれてしまったので、しばらくはここに定住するつもりです。でも、福島のごことは毎日思い出します。一日も早く、ひとりでも多くの人が笑顔になれる世の中になるのを願っています。」

取材中に見せる笑顔が印象的でした。